

沖積層は長峡川と下田川沿いの低地に広く分布する。沖積世（一万年前から現在までの後氷期）の温暖化期に生じた縄文海進の海域は、行橋市の下検地付近までしか侵入しておらず、勝山付近の沖積低地は直接には海進の影響を受けていない（千田、一九八四）。しかし一部の沖積低地の地下では基盤までに一〇^ミ以上に達する第四紀層を挟むこともあり、沖積層の下に泉層以下の第四紀層が埋没していることもある。

二 勝山町の地形の特徴

勝山町は北部を竜ヶ鼻から塔ヶ峰にいたる貫山地、西部を竜ヶ鼻から障子ヶ岳を経て飯岳山（大坂山）に至る福智山地東部の山塊、南部を飯岳山から御所ヶ岳へ連なる御所ヶ岳山塊に囲まれているが、東部は長峡川と今川などの形成した台地と低地が広がり、三方を山に囲まれた盆地状の地形を呈する。また、町域中北部には、観音山塊が張り出すため、この山塊より西側は四方を山地に囲まれたように見え、典型的な盆地状の地形を示す。

町域の北端部から西部にかけて囲む山地の高度は、海拔高度五〇〇^ミ前後であり、町内の最高地点の竜ヶ鼻でも六八〇^ミである。この山地の高度は必ずしも大きくはないが、石灰岩や三郡変成岩からなる山腹は、平均傾斜で三〇度を超えており、福岡県内では有数の急峻な斜面を構成する。

花崗岩類の山塊である観音山塊は、高度では二〇〇^ミを超える小山塊で、町域を二分するように聳えているが、平均傾斜は三〇度に満たない。観音山塊や障子ヶ岳周辺の福智山地東側斜面のように花崗岩類が分布する地域は傾斜が緩く、ここには崩壊した花崗岩類の転石や土石流堆積物が谷間を埋めている。

花崗岩類は風化浸食されやすい岩石である。このため花崗岩の分布地域に浸食作用によって盆地が形成されることがある。

勝山町の北東部では、花崗岩類の浸食が進み、地表の起伏数十^ミ程度の浸食平坦面が第四紀中期（丘陵の原地形が形成された数十万年前頃）までに形成されている。この地域に残された一部の花崗岩の高まりは、海拔高度八〇^ミ未満の丘陵を形成した。新町から宮原にかけて、松田付近、上稗田から下稗田にかけて、長川から池田にかけてはこのような丘陵が分布する。

花崗岩類山地の山麓部では、土石流扇状地性の堆積物が分布し、阿蘇四火碎流堆積以前には扇状地を開析する下刻作用が生じて、中位段丘が形成された。これらの中位段丘群は、宮原・菩提・松田・中黒田周辺などに分布する。

約九万年前に阿蘇四火碎流は御所ヶ岳などを乗り越えて勝山町の当時の低地を埋め尽くした。阿蘇四火碎流堆積物は現在も大久保から中久保付近、黒田付近、長川や池田などの海拔高度三〇^ミ前後の地域に平坦面を形成することが多い。図1—4で低位段丘とした地形の大部分は阿蘇四火碎流堆積物の堆積面で

あり、最終氷期（約一〜七万年前）の河川によって形成された低位段丘は火砕流堆積面を若干削った場所の部分的に分布する程度である。また矢山や浦河内の谷にはごく小規模な低位段丘があるが、この図1—4では表現できないほど小規模なものである。低位段丘の規模が小さいのは、この地域が阿蘇四火砕流によって埋没平坦化した後に大規模な浸食作用を生じる河川が形成されなかったことが大きい。

阿蘇四火砕流堆積物は未固結できわめて削られやすい。このため長峡川や下田川沿岸の低地は広い谷が形成されて、河川が自由に氾濫できる沖積低地が形成された。今日では堤防などによって沖積低地の河川の流路は固定され、水田地帯へと変貌している。

写真1—3は御所ヶ岳方向から平尾台方向を望見した写真である。写真中央付近の丘陵や貫山地の平尾台の一部が石灰岩の採掘で奇妙な凹地を形成したスカイラインを見ることができ。写真1—4の写真は仲哀トンネル下から勝山町役場方向を望見したものである。遠方には葦島や周防灘が望みされるが、勝山町域には細長く延びた森林で表される丘陵や阿蘇四火砕流の堆積地形が随所に分布していることが見て取れる。



写真1—3 御所ヶ岳方向から見た勝山町



写真1—4 仲哀トンネル付近から勝山町役場方向を見る

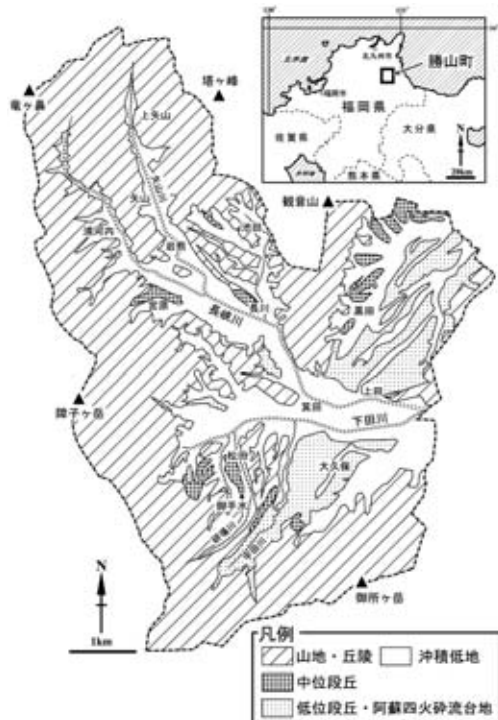


図1—4 地形分類図

第三節 気候と気候景観

一 気候の特徴

日本海型気候 北部九州の瀬戸内海側の内陸部に位置する勝山区の勝山町 山町は、福岡管区气象台（二九九〇）の気候区分によれば、九州地方の日本海型気候区に相当するとされる。瀬戸内海に近い勝山町が日本海型気候区に区分されているのは少し意外に思われるであろう。九州北部沿岸の伊万里市付近から福岡市、北九州市を経て大分県の中津市に至る地域は、冬型の気圧配置で雲が立ち込めるため、日本海型気候区として一括される。ただし本州地域の日本海型の気候区と異なり、年間を通して梅雨期の降水量が非常に多い点の特異な点である。

この気候区の特徴をまとめると、年平均気温が一五～一六℃であるが、一月の平均気温が六℃以下で九州沿岸部では他の気候区より寒いこと、年間降水量は一七〇〇㎜前後で九州では比較的少雨であるが、大分県東部の内海型気候区よりは多雨であること、冬に曇天が多く強い北西風が吹くこと等の特徴を挙げることができる。勝山町西部の貫山地や福智山地は瀬戸内海側の気候と日本海側の気候とを明瞭に区分し得るような地形的な気候境界をなすほどの高度はないことがわかる。

気温と降水量分布傾向から、勝山町付近の年間平均気温は一五℃程度、年間降水量は二〇〇〇㎜程度になるものと判断される。冬にもある程度の降水量が認められるが、西部の山地域を除けば、冬型の気圧配置で積雪が認められることはほとんどなく、瀬戸内型の気候に漸移する場所としての特徴も認められる。

アメダス資料による勝山町の気候について、気象庁の山町周辺の気候の特徴 アメダス (AMeDAS: 地域気象観測システム) の観測点が町内には設置されていないために詳細は明瞭ではないが、隣接する行橋市福富に位置するアメダス観測点の資料で、およその傾向は知ることができる。行橋のアメダス観測データから一九八三年から一九九〇年を見ると、日最低気温が〇℃未満となる「冬日」は年間二四～六四日、年間最低気温は氷点下三・九～氷点下五・九℃であった。またこの期間の日最高気温が三〇℃以上となる「夏日」は一六～六〇日、日最低気温が二五℃以上となる「熱帯夜」は〇～一四日、年間最高気温は三二・四～三四・七℃であった。年間日降水量の最高は、八六～二一〇㎜であった。これらの値は、勝山町周辺の通常の気候変動の幅を示している。

この結果から、勝山町では「冬日」は十二月初めから三月下旬までに出現し、北部九州としては比較的厳しい長い冬を持つことがわかる。また、「夏日」は六～九月に出現するが主に梅